
紅と蒼(仮)

ピンクマン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅と蒼（仮）

【Z-マーク】

Z9956Y

【作者名】

ピンクマン

【あらすじ】

少年はある日、見てはならないもの　いや、見なればよかつたもの　を見てしまう。それにより、少年の日常は大きく歪む。

追われる存在、自身に隠された秘密、そして……異能の力。

一晩の出来事によって少年は全てを知るために学び、励み、自身の潔白を証明するべく闘うこととなる。

やがて青年になつた彼は、密かにその時を待つのであつた。
様々な人に触れながら……。

他サイトとの重複投稿作品です

プロローグ

「はあ……はあ……」

所々で紅の炎が燃え盛る闇の中、黒髪の少年は息を切れ切れにしながらひたすら走る、走る。

その表情は、何者かに怯えているかのように恐怖心に駆られているもので、時折後ろを振り返りながら、ただひたすら燃え盛る家が建ち並ぶ大通りを駆けていた。

空は一面闇に覆われていて、電灯がなければ辺り一面真っ暗闇……というのが普段この大通りの夜というものなのだが、今回ばかりは状況が違っていた。

少年が必死に駆け抜ける大通りの両側にはいくつもの家屋が見受けられるが、その全ての建物から鮮やかな、しかし人々を恐怖に陥れる紅の炎が燃え上がっている。

「あつ……」

少年が後ろに気をとられると、不意に足元の何かに躊躇転倒してしまう。

全速力で走っていたため勢いよく倒れてしまい、今まで擦れたのか、右脚からは僅かだが血が出てきている。

普段ならここで何に躊躇したのかを確認するなり、擦れた部分に唾をつけるなりするのだが、今回ばかりはそうもいかなかつた。

「早く……逃げなきゃ」

恐怖はすぐそこまで近付いているのだ。

脚の痛みに耐えつつ、すぐさま立ち上がり、再び駆け出そうとする少年だったが

「みいつけた」

不意に背後から聞こえた男性特有の低音の氣味の悪い声に、思わず体が硬直してしまった。

少年はそのままゆっくりと顔を後ろに向け、声の主を確認する。確認せずとも、つい先ほどまで耳にしていた声と一致するため、そこに恐怖の対象がいることは分かつていた。

顔を向けた先にいたのは、やはり自分の恐怖の対象であり、この真夜中にいつもとは違つ、平和とはかけ離れた光景を作つた張本人である。

丘髪交じりの金色のオールバックに、ふつくらと脹らみ脂ぎった顔。耳には金色に輝くピアス、首には銀色に輝く豪華なネックレス、腕には金色の宝石が鏤められたブレスレット、茶色のスースを破らんばかりの苦しそうなお腹、太さの割りに短い脚、闇夜に紛れる黒い革靴を装備した強面の男だ。

顔はお世辞にも整つていては言えず、不細工といつも葉が相応しいだろ？。

男は目の前で震え上がつてゐる少年を見やると、口元を僅かに吊

り上げ、いやらしく微笑みながら一步、また一步と少年に近付いていく。

恐怖から脚が動かないのか、両手を使って一生懸命距離を保とうとする少年の行動を見て、男はにやにやとしながらゆっくりと口を開く。

「よくここまで逃げたもんだが、そろそろ観念したらどうだ」

「だ……黙れ……お前にそ観念したらどうだ」の悪党……」

男の言葉に、手は止めずに脚とは違ひ自由に動く口で精一杯の強がりを口にする少年。それを聞いた男はよほど面白いと思つたのか、大口を開け下品に笑い始める。

「私が何に観念するつて？ 状況がまだ分かつてないようだな……。それに、悪党は私ではない」

「な……何を言つてるんだ……」

男の意味不明な発言に、思わず首を傾げる少年。ふと、つい先ほど自分が目撃してしまった光景を思い出す。

そこでは、街外れの倉庫で何やら紙切れを持ち出す男の姿があった。

男は相変わらず脂ぎった顔でにやにやと氣味の悪い笑みを浮かべ

ながら、鍵を破壊して侵入したらしい倉庫から出ると、隣に立っていた黒マントの怪しげな雰囲気の漂う男に向かい、小さく右手を上げる。

するとそれが合図だったのか、黒マントの手から倉庫に向かつて放たれる炎の矢。黒マントの手に弓矢は確認できず、右手を倉庫に向けただけで炎の矢が放たれたことにいたさか疑問を感じた。

ありえない光景を目にし、動搖してしまった少年は思わず後退し、その場に落ちていた木の枝を踏んでしまう事で、自らの存在を知らせてしまうのであった。

「ちゅうどいい……」

少年の姿を発見した男がそう呟くのを聞く前に、その場から駆け出す。物凄い危機感を感じたのだ。見たことの無い力で一瞬にして倉庫を燃やした黒マントの男に……。

次は、自分があの倉庫のようになってしまつ。そう感じた少年は考えるよりも先に体が動いていた。

……この場にいたら決して怪我では済まないと……。

街が炎に包まれたのはそれからすぐのことだった。あまりに突然の出来事に、人々は驚き、理解に苦しむ様子を見せるも、逃げると、その行動を本能が導き出したのか、人々はすぐに街から撤退していく。

……一人逃げ惑う少年を残して。

そこまで振り返った少年は、「ち、違う！　お前が悪党だ！！」と、震えながらも怒声を上げる。

そんな様子を滑稽に思えたのか、男は右手で口を押さえながら「くつくつく……」と笑いを堪えながら、今だに震えの止まらない少年に対し口を開く。

「確かに、この街を現在の状況にしたのは私だ。だが、このような状況に陥れたのは貴様だ」

「な……！　俺は何もしていない……」

男の口から放たれるあまりにも滅茶苦茶な言葉に、少年はこれまでに無いほどの大声を上げる。

そんな動搖の隠し切れない少年に、男は「そうとも……」と呟き、更に話を続ける。

「だが、こうなったのは貴様のせい。それは搖ぎ無い真実だ。この街一番の権力者の私が証人なのだ……誰も疑うことはあるまい。それに……死人に口無しと言うしな」

そこまで言つと、突然男の前に現れる黒マントの男。そう、この街を現在のような火炎地獄に陥れた張本人だ。

「始末しますか？」

男の前に現れた黒マントは、男の低音の声とは違い、綺麗なテノールの声でそう尋ねる。

黒マントの間で、「ああ、やれ」と懐から葉巻を取り出しながら言つ男。

その言葉を合図に、黒マントは右手から倉庫を燃やしたのと同じ、炎の矢を出現させる。

その様子を感じ取った少年は、ようやく硬直のとけた体を起こし、男達に背を向け再び走り始めるが、それは無意味に等しいもので、黒マントの放つた炎の矢が背中にヒットする。

「ぐつ……」

炎の矢と言つても、本物の矢とは違ひ少年を貫通することは無かつたが、背中に激痛が走る。

死にはしなかつたものの、再びその場に転倒してしまい、文字通り絶体絶命という状況に陥つてしまつ。

この状況に思わず絶望してしまつ少年だったが、真実を街の皆さん伝えるべく、両手を使って必死に地面を這う少年。

「ほう……まだ息があるか。ならば、これで止めだ」

そう言つて、右手に先ほどと同様細長い炎の矢を出現させる。だが、先ほどと違つ点が一つだけあつた。

炎の矢は一本ではなく、複数出現していたのだ。

「終わりだ」

右手に出現させた複数の炎の矢を少年に向けて放つ黒マント。放たれた矢は物凄い速さで少年に向かい、轟音と共にその場が燃え上

がる。

「やつたのか……？」

相当大きな音だったのか、男は両手で耳を塞ぎながら黒マントに尋ねる。

素顔を隠すためなのか、顔に黒いマスクをしているため、表情を読み取ることは困難だが、何となく煮え切らないような表情をしている黒マントだったが、男がそれに気付く様子は無い。

「いえ、あれはあのような爆発が起こる”能力”ではありません。恐らく、何者かが介入し、少年を逃がしたのかと……。念のため、手配書を作つておいた方が良いかと。万が一この街に戻ってきた時のために……」

それだけ言うと、黒マントは再び男の前から姿を消した。

黒マントは少年を消し損ねたことに若干イラついている様子だったが、男はそんな事を気にする様子も無く、ただ自分の計画が上手くいっているのを喜ばしく思うだけだった……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9956y/>

紅と蒼(仮)

2011年11月30日01時51分発行